

2025年6月15日 説教「キリストについていく」

ルカの福音書9章18～27節

9章は弟子達の伝道派遣に続き、5000人の給食を読んできました。その間には、国主ヘロデがイエスの評判を聞いて、イエスに会ってみようとしたという記事が入っていました。

## 1. イエスをだれと言うか (18～21)

- ①祈っておられたとき (18)「さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。『群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。』」

オリーブ山でひとり祈るイエス、ゲッセマネの園で苦しみ祈るイエスの姿が思い出されます。ここでも一人で祈っておられた主は、ともにやってきていた弟子達にたずねたのです。群衆はご自分のことを何と言っているかを。こんなことは聞かなくてもわかっていたはずです。

- ②ヨハネともエリヤとも (19)「彼らは答えて言った。『バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのとも言っています。』」

すると、かれらは答えます。あのヘロデによって殺されたバプテスマのヨハネという人があれば、旧約の預言者エリヤだと言う人もあり、さらには昔の預言者のひとりが生き返ったのではという者もいることでした。要するに、イエスのことを預言者であると認めているということした。

- ③神の子キリスト (20～21)「イエスは彼らに言われた。『では、あなたは、わたしをだれだと言いますか。』ペテロが答えて言った。『神の子キリストです。』すると、イエスは、このことをだれにも話さないようにと、彼らを戒めて命じられた。」

ここで、イエスが弟子達にたずねた理由が明らかになります。つまり、イエスは弟子達の信仰を確かめようと思われたのです。「それではあなたがたは、わたしをだれだと言うのか」。すこし戸惑う者もいたでしょうが、ペテロは代表していいいます。「神の子キリストです」。適確な答えてした。しかし、内実が伴う理屈であったかは別です。ともあれ、ここで弟子達に、そのことをだれにも話さないようにと命じます。神の子であること、救い主であることが早くに広まれば十字架の道が早まってしまうからです。

## 2. 受難預言と従うこと (22～24)

- ①受難とよみがえり (22)「そして言われた。『人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。』」

しかし、人の子イエス・キリストは自らの十字架への道を予知し、明確に預言しています。即ち、様々な受難に会い、ユダヤ教の長老、祭司長、律法学者たちに捨てられて、ついには十字架刑を受けるということを実に真っすぐに語っているのです。それは人間が救い出されるためには、どうしても必要でありましたが、復活されるという預言には希望もありました。

- ②自分を捨て (23)「イエスは、皆のものに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』」

将来の十字架刑を預言されたイエスは、その意味を理解させるために弟子達に、キリストに従う者の精神を教えられます。即ち、キリストについていきたいなら、自己中心の自分を捨てること、日々に自らに与えられている十字架を負ってきなさいと言うのです。

- ③自分のいのちを失う者 (24)「自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」

前節の教えはかなり厳しいように思えます。しかし、ここにその道理が示されるのです。つまり、見方をまったく反対から見させるのです。自分のいのちを救うことに終始する道と、自分のいのちを失うことを覚悟して生きる道は、結果として逆になるうというのです。

### 3. 主にあって生きていく者達 (25~27 節)

- ①全世界を手にしても (25)「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありません。」

23 節のお言葉の理由が続きます。人が手に入れる物にはいろいろとありますが、仮に全世界を支配する王となったとします。しかし、神を見失い、その救いを得ることができなければ、その人にとってそれは取り換えしの効かない損失となるのだというのです。

- ②主を恥じること (26)「もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。」

それでもまだ、キリストについていくことをためらい、そのお言葉を尊ばずに恥とさえ思うようなことがあったとします。そういう場合、人の子であるキリスト及び、父なる神、また御使いが栄光のうちに、再臨する槌には、そのような人々のことを恥じることとなるというのです。

- ③死を味合わない者達 (27)「しかし、わたしは真実をあなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国を見るまでは、決して死を味わわない者たちがいます。」

「ここに立っている人々の中には、神の国を見るまでは、決して死を味わわない者たちがいる。」という箇所については、ヨハネの福音書 8 章 51 節を参照しましょう。そこには「だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません。」とあります。主イエス・キリストに従い、自分を捨て、日々十字架をあって生き、御言葉を守っていくならば、死ののろいや悲惨を味わって死ぬことはないというのです。

《結論》 今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。「

第一は、あなたはキリストをだれとするかについてです。

イエスとは誰か。このことはユダヤの国主ヘロデですら、関心を持っていました。自分が亡き者にしたバプテスマのヨハネのよみがえりだなどという噂が飛び交うにあたって、黙ってはいられなかったのです。巷においても、イエスはエリヤのよみがえりだ、昔の預言者が生き返ったのだなど、弟子達の耳にも入っていました。そのことを受けて、イエスは最も近くにいる弟子達に、「それではあなたがたは私を誰だと思うのですか」とたずねました。ペテロは「神の子キリストです。」と答えました。それは信仰告白でした。クリスチャンになったばかりとはいえ、その当時なりの精一杯の告白でした。これからイエスに仕え続け、二年余り経って、イエスが逮捕された時にペテロは、イエスを知らないと言ってしまう。しかし、イエスの十字架と復活を経て聖霊降臨があり、彼は用いられます。ですから、その時点なりに、私たちは信仰告白をしていくことが大切なのです。今日、あなたはイエスを誰だとしますか。心の中で信仰告白をしていきましょう。

第二にクリスチャンの価値観についてです。

かつて所属していた教会の方が、企業するということがありました。クリスチャンとして、会社を建て上げました。その時に、掲げた御言葉がルカ 9 章 25 節でした。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありません。」。企業ですから、利益は追求しなければならないが、あくまでも神の栄光のために、働きをしていくのだという精神でした。私たちは、何らかの意味での働きをし、その報酬を得て生活をしています。そういう意味では、私たちはある意味では利益を得るために働くことは間違いありません。しかし、その根本を覚える必要があります。ウェストミンスター小教理問答 問 1 にこうあります。「人の主な目的は、何ですか。」その答えは、「人の主な目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」。抽象的に思えるかもしれませんが、私たちは自らの栄光のためにではなく、神の栄光のために、地上での働きをなしていくだと覚えていきましょう。

第三に、キリストについていくという点についてです。

23 節において、イエス・キリストについていきたいと思うなら「自分を捨て、日々自分の十字架を負い、キリストについて来なさい」と教えられました。私は召しを与えられて、神学校に入学したとき、この御言葉を目標にしました。この御言葉にいつも促されながら、歩みをしました。入学者たちの短い証しの文書が発行されたのですが、そこでは 23 節を引用しながら、「私はキリストにかけた」と記しました。意気込みばかりでしたが、その時なりの証しでした。この御言葉は、キリストによる、切り立った山のような御言葉ですが、今の時点における信仰によって、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、イエス・キリストについて行こうではありませんか。自分の立場、信仰にそぐわない主義、趣味、好み、時間の使い方などを捨て、キリストの十字架を負い、この方についていきましょう。